

鍋石の奇水

大森から水内川に流れる谷川の途中の川底一面に、大きな石があります。

むかし、弘法大師がここを通られたとき、窪んだ石に鍋をかけ、食事をされたところから、ここを鍋石と名づけられました。

其の時、そばに箸を立てられました。その箸は逆さまだったそうですが、そのまま生えつきました。したがって、大木になったこの木の枝はすべて下向きになりました。

人々は、この木のことを弘法杉とって、名物になりました。

また、そのとき身体を洗われた所をたらい岩といい、川底の大きな平岩に窪みがあります。これを弘法大師の足跡だといひます。

江戸時代に書かれた「都志見往来日記」によると、鍋石のことが次のように書かれています。

「下伏谷より鍋石に至る。谷川の向こうに明神杉一本あり、根は広がり、岩を絡み、枝や葉は谷川を覆っている。(この杉のことを弘法杉といたたのではないかと思われる)

この谷川の底のすべて一面が大石である。杉に気の下流の底の大石に二つの窪みがある。これを釜石、鍋石とっている。石は三尺(約一メートル)余り、この釜石を洗って雨乞いしていた。洗う人は箕笠をつけ、「大雨じゃ、やれうるさ、やれうるさ」と言って雨乞いすれば、雨が降るといっている。



その脇に、馬のひづめ跡が一つあり、枕石がある。

ここから、十間(約二十メートル)ばかり下に、巖島明神の小社がある。その社の後ろより泉が湧き出て流れ落ちている。これを眼洗い水とって眼を病める人が、この水で眼を洗い平癒したという。この水は清泉鏡のごとし、青黒き石の間からつたわってながれているのに、この水の流れた後は鮮やかで朱のようである。奇(めずらしい)とすべし。